
あなたの隣にはにーみるく

春野あずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの隣にはーみるく

【Nコード】

N1680C

【作者名】

春野あずさ

【あらすじ】

一年前、妹・茄乃　なの　をなくした中学二年生の少年華野宮輝照は昔から自分の名前に嘆いて生きてきた。そんな輝照の家に自らの妹と名乗る自分と同じ髪の毛の色をした碧眼の女の子がやってくる。そんな彼女は輝照の…

第一話：俺の名前は華野宮 輝照。

一年前、
妹が

死んだ
――
…。

交通事故だった。
ごく一般的な。

俺は、悲しくて悲しくて、
あの時のことが今も忘れられない。

かわいかった妹の茄乃。

一年前に俺に妹というものはいなくなったはずだった。

でも、俺には
妹ができることになる。

それは、今の俺には知りえないことだった。

この、おかしな名前を何度嘆いて生きてきたことか。

最悪だ俺の名前。

なんだ?? 輝照ってよー。テルテルとは、なんなんだ!! テルテル
って!!!

てるてるぼうずのことか? ふざけんな!

俺は、この名前のせいで嫌な人生を歩んできた。

たしか、小学生の時は入学式当日から「てるてるぼうずかよーこい
つ」と上級生に笑われた。

そんで、俺ってば顔真っ赤にして泣きじゃくりながら親と家に帰っ
た。

俺は、今中学二年生。

中学でもこの名前のせいで嫌なことがいっぱいあった。

俺が好きな女子に名前が変で大笑いされた。

あれは、マジ胸に突き刺さった。うん。ハートにな。俺の。

他にも、クラスの奴らがみんな俺のことを「てるてる坊主」って呼
ぶようになった。俺のことをちゃんと名前で呼んでくれるやつはい
ない。

いや、本名も実際嫌だが、「てるてる坊主」よかあましかったこと
だ。

ともに、かくにも、俺が名前で絶対に嫌な思いをしているのは事実だ。

で、思うのがこの名前をつけたのは誰だ？
そんなの親にきまつてる。

だから、そういう点で俺は母さんを憎んでる。

ちなみに、俺に父親はいねえ。

なんでかって？

俺の母さんがいうに離婚したっていつてた。
俺が生まれる少し前に。

だから、俺は親父の顔をみたこともない。

別に、見たいとも思わない。

他人だ。俺は実際しゃべったことも見たこともさえないのだから――
――。

そして、俺の親父は外人だったと予測される。

俺の、髪の毛はすこし黄色い。

金髪にしてんだろーって友達や教師に言われるが違う。そして、金髪ほど、俺の髪の毛は黄色くない。

クリーム色？というのかいやそれよりもすこし濃いそんなあいまいな黄色。

そんな、俺の髪の毛から予測して父親は外人だと予測できるのだ。

母は、日本人で髪は――否。茶髪にしているから茶色だが本当の色は

黒だ。

もし、俺の親父も日本人だったら俺の髪がこんな色になるわけがないのだ。

あと、疑問に思うことが一つあった。

もういないけど――

妹の茄乃の髪の毛は黒かった。

何故？

その、疑問は続くばかりだった。

でも、それを考えると頭に浮かぶ茄乃の顔。

悲しくなる。 茄乃は交通事故で死んでしまったのだ。

ツインテイルが似合う子だった。十一歳だった。

生きていれば、昨日が誕生日だった。

++ ++ ++ ++

俺はリビングでテレビを見ていた。

今、話題騒然らしい「愛の海」足がつっておぼれちゃっわ」を見ていた。

『タケルくん…あたし…おぼれちゃっわああ』

『澄子おおおお！！！！』

『げふっ！』

ちやつらっちやつちやつ

『澄子！僕の手につかまりたまえ！』

『わかりましたわわ！！タケル君！』

すると、ベルが鳴った。

ピ——ンポオオオオオオン

「は！？客！？誰？」

俺はソファを立ち上がり玄関へ向かった。

ドアを開ける。

そこには

俺と同じ髪の色をした青目の少女がこつそつな黒服サングラスつけてます二人と一っしょに立っていた。

「どなた？え？母の知り合い？」

すると、その女の子は口を開いた。

「お兄様。私は、はにー・みるく。あなたの妹ですよ？」

「はあ？」

何いってんだ？？こいつ。

俺の妹は茄乃だけだ。

第一話：俺の名前は華野宮 輝照。（後書き）

これから頑張つて連載していきたいと思います。
まだまだ未熟なのでアドバイスをいただけるととてもうれしいです。

第二話：お姫様参上 ――怪しい女の子―

んだ？こいつら。

俺は、ドラマのいいところでベルに呼び出されたものだから気分が悪かった。

「お兄様はこんなぼろ屋敷にすんでいるんですね。全くちゃっちいこと」

上品そうにみせて「ちゃっちい」などの上品じゃない言葉を混ぜるドレス姿のあやしい少女が高笑う。

「てめっ！なんなんだよ。いきなりくるにして俺の家をぼろ屋敷とか言いやがって」

俺も、黙っちゃいなかった。そう、俺が怒鳴るとうしろにいた俺よりも超体系のでかいエージェント（サングラス装備）の二人が少女の前に立ちはだかる。

「姫様に触るな！！この不屈き者！」

そのうちの一人が怒鳴った。
は？姫様？なに？こいつら。

なんだ。子供の、お姫様ごっこね。うん。きっとそうだ。

「お姫様ごっこをしたいんならおうちで人形とやりな」

俺は、そう言い手をひらひらと振りドアをしめようとした――

――その時……！！

ドアと壁の間はわずかな隙間しか残っていなかったが、エージェントの一人がその大きい手をどうにか滑り込ませドアをへし折り開けたのだ。

その後継はさすがに俺は目を点にし口をがぽつとあけてみていた。

「お兄様。お姫様ごつこだなんて笑わせますわ。私はれっきとしたラズベリー王国の姫なのですよ？」

にこりと笑みを浮かべる少女。
俺はそれに寒気が走った。

マジでなんなんだ、こいつら。

俺なんかした？

恨み買われるようなことした！？

「お兄様。詳しくはお兄様のぼろ屋敷のなかで話させていただきますわ。あがらせてもらいますわよ」

そういうとドアの前に立つ俺をエージェントの一人がその大きい掌で押しのけ少女は入っていく。

なんか、侵入されちゃってるぞ！？

「山田、田中、いくわよ」

「あいあいさーーーーー！！！！」

少女が、エージェントの二人（平井・田中）に言うと二人は手を重いつきし額に揃えそう叫ぶ。

遊びにもほどがあるな…と俺は思った。

そして、その二人も入っていく。

「はは…はははは…」

俺はあまりに呆れてさびしく笑い声を洩らした。

華野宮輝照のはらわたは煮えくり返っていた。

なんだか、あやしい奴らが俺の家に、侵入しちまった。

しかも、ドアも壊しやがって、どうしてくれるんだよ。マジで。

怒られるのは俺なんだよ。あいつら。ほんと嫌な奴らだぜ。

あの、ゴスロリとマッチョエージェント（サングラス装備）の二人め。

90度へし曲がったドアは心なしかさびしそうに見える。

まあ、俺にさびしいかなんてわからないが…

ところで、このドアの壊れたことを母ちゃんにどう説明すればいいんだ！？どうする？俺！どうするよ！！あ…やべ、ライフ・ードじやありやめーし。

小田切・ヨー状態になってもしょうがない。

明け離れた家の奥から声が聞こえる。

「お兄様。早く来てください。あなたを待ってる時間がかなり無駄ですわ…ふああああ〜」

あの、ゴスロリ野郎。何、あくびしてやがる。

あいつ、上品なふりして、上品じゃない。

あれは、お嬢様の「まがいもの」だ。ま・が・い・も・の！……！！

俺は、奴のいうことを聞きたくないがため、そとでぽつりと立っていた。

すると、どずどずと、人が歩く音が聞こえてくる。

そして、振り返り家の中をみるとあのエージェント（サングラス装備）の二人が手をばきばきとならしながらやってくるのだ。

「あ……あ……まさか……はは」

まさかの、まさかだった。

エージェントは二人で俺の腕を両方ともあら掴みし、リビングまで引きずって行った。

その時、思い切り強い力で無理やり引つ張られたせいか、俺の腕は「ぼきっ！」と痛々しい音をもらした。

骨折はしていないと思う。たぶん……ああ、たぶんだ。（確証不可）

「……最悪」

俺は弱弱しく呟いた。

連れてこられたのは、リビング。

俺がさっきまでドラマを見ていた部屋。

そして、ソファに座らせられる。

俺が、さっきまで座っていたソファ。

ソファはもうひとつあって間にテーブルを挟んである。
ゴスロリはそれに座って静かにこちらを見据えていた。

「では、話をはじめましょうか？」

「ふざけんしゃねーよ。てめえ。人の家に勝手に入りやがって。この、「不法侵入者」！交番にいい届けてやる！」

ゴスロリは黙っているが、俺のうしろに待機している大男は違かった。眉間にしわをよせ、怒鳴った。

「なんだとっつっ！！この！下郎者が！姫様になんてことを！！」

そう言つて、俺の両肩をばちいいん！！とはたいた。痛い。ひりひりする。それも当たり前。

大男が二人本気で方に平手打ちをしてきたら超痛くて当たりまえ。

「じゃあ。話をはじめましょうか？」

もう一度、ゴスロリがつぶやく。

「……………」

俺は、もう何も言わなかった。

「さっそく単刀直入？でしょうか。実のところ、お兄様は、私とは腹違いの兄弟なのです」

「え？」

こいつなに言つてやがる。

俺の妹はナノだけだ。

俺は嫌な思い出を思い出して怒鳴った。

「ふざけんなっつ！！俺の妹は茄乃だけだっつ！！」

俺が、怒鳴つてもゴスロリは顔色一つ隠さずにこちらを真摯に見つめてきた。

「もちろん、茄乃さんもあなたの列記とした、妹です。ただし、腹違いのね」

その時、すべての合点がいった。

茄乃の黒髪にたいし

俺のこのあいまい黄色のような髪の色は。

親父が違っからだっただ——

それなら、合点がいくというものだ。

要するに——

俺の親父はこいつ——

このゴスロリの親父ということか——？

そんな時、ベルは、鳴った。

ぴiiiiiiiiいんぽおおおん！！

「はい！」

俺は返事をして、玄関へ向かう。

走っていつてみると

そこには、クラスメートの

黒川トモがいた。

「トモ——！？」

黒川は俺のことをてるてるぼうずといわねえいい奴だ。真面目で几帳面できれい好きで……とにかく俺は気にいってる。

そんな、黒川がなぜ今日、俺の家に？

今日は、学校の開校記念日で休みのはずだ。なんで？いるんだ？

とにかく、どうしよう。ゴスロリとエージェント（サングラス装備）の二人を見られたらなんだかやばい気がする。どうしよう。どう、ごまかそう？

黒川がすつとんひょうな顔をして、いった。

「この、ドア。何？華野宮がやったの？」

いきなり、核心に近いことを聞いてくる黒川。

「え？え？それはさ…隣の家の橘さんがかっているブルドックのブル太が暴走してやつちやったみたいで…」

ごまかしになつていないごまかし。でも、そんなごまかしでも黒川はだませた。

「ン…そうなん？」

「誰かいるのですかー？」

「！？」

ゴスロリの声が奥から聞こえてくる。やばい。

黒川に聞かれた！？

「何？華野宮。今の声。誰——？」

「え…これは…」

俺は慌てふためこういった——

続く

第二話：お姫様参上　！〜怪しい女の子〜（後書き）

頑張って書きましたあっw

すこし書き足しなどもしました。

できたらアドバイス感想ください**^^*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1680c/>

あなたの隣にはにーみるく

2010年10月22日00時29分発行